



Title	R. K. Narayan とアメリカ
Author(s)	松木園, 久子
Citation	大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 127-140
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/78028">https://hdl.handle.net/11094/78028</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## R. K. Narayan とアメリカ\*

松木園 久子\*\*

R. K. Narayan, one of the most famous Indian novelists, writes about the everyday life of the middle class in Malgudi, an imaginary town in South India. Some scholars admit the world of Malgudi is in part westernized. But they never doubt that the West has one-sided influence on Malgudi. In this essay I intend to examine mutual influence between Malgudi and the West (especially America) through an analysis of his three novels *The English Teacher*, *The Guide* and *The Vendor of Sweets*, as well as his autobiographical essays.

*The English Teacher* is his first novel published in America. It is based on his own experience. The English teacher Krishna loses his wife and recovers from the grief through contacts with her spirit. This spiritual part of the novel impressed American readers so much that Narayan was often requested to talk about his mystic experiences. During his stay in America he found that most Americans had a strong prejudice that Indians had spiritual power. At that time he was writing the novel *The Guide*. In it the protagonist Raju, a layman, is misunderstood as a saint and is compelled to fast until it rains. It can be said that he is suffering sainthood that the Other has enforced on him.

Mali in *The Vendor of Sweets* is one of the westernized Indians. He goes to America to study and knows that India is asking America for food. It is not hard to imagine that he feels ashamed then and is forced to reject Indianness so that he may not be regarded as one of

---

\* R. K. Narayan and America (MATSUKIZONO Hisako)

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

the begging Indians. In his case, westernization does not mean only influences of the West but also resistance to the stereotyped idea of 'begging Indians'. His American wife Grace, on the contrary, adores the Indian life. She tries to be an Indian, but makes funny mistakes because of her lack of understanding of the Indian reality. Mali and Grace are seeking a new identity. On the other hand, Mali's father Jagan is seemingly a typical and traditional Indian. But his Indianness is not always stable. He is also influenced by Mali and Grace.

In this way, contacts with other cultures bring about complexity both in relationship with the Other and in self-identification. I try to prove that Narayan shows this complexity in his ordinary world of Malgudi.

## 1. はじめに

インド人作家 R. K. Narayan がこれまでに発表した小説は、いずれも南インドの Mysore 市をモデルとした架空の街 Malgudi に暮らす中流階級に属する人々の日常生活の機微を描いたものである。その描写は生活の一挙一動、洗面や食事にまで至っている。彼の作品を評して、インド人研究者 Shankar は「ナーラーヤンの描く人々や場所に非現実的と思える箇所はほとんどなく、我々が慣れ親しみ、経験や報道を通じて知っているものである」と述べている(Shankar 137)。これまでのナーラーヤン研究は、彼がインドの神話や慣習、ヒンドゥー教的概念といったインド的素材を作品でどう扱っているかに焦点を絞ったものが大半であった。一方、マルグディに住む人々が西洋の影響を受けている(semi-westernized)と指摘する声もあるが(King 180)、そこでも西洋的な事物、価値観が西洋からインドへもたらされるという一方向的な影響関係が前提とされているようである。確かに、時代とともにインドにも西洋の影響が認められる。しかし、本来インド的であったマルグディの世界がひたすらに西洋化の道を行っていると見なすのは早計ではないだろうか。本稿では、従来重視されなかった、ナーラーヤンの小説における西洋特にアメリカ(人)とインド(人)の接触、またその結果生

じる相互の影響関係について様々な方向から考察したい。アメリカ(人)が関係しているテキストとして *The Guide* (1958)と *The Vendor of Sweets* (1967)の小説2点を取り上げる。また、アメリカで話題となった小説 *The English Teacher* (1945)、アメリカ滞在記 *My Dateless Diary: An American Journey* (1964)、自伝 *My Days: A Memoir* (1974)、エッセイ集 *A Writers Nightmare* (1988)、*A Story-teller's World* (1989)といった作品も適宜参照する<sup>1)</sup>。具体的な考察に入る前に、ナーラーヤンという作家が置かれている独特な状況について触れておきたい。

## 2. ナーラーヤンの文学の位置付け

ナーラーヤンの小説、短編集、エッセイなどの作品はすべて英語で書かれており、原作がイギリス、アメリカ、インドを中心に出版されているほか、日本、ドイツ、フランスなどでもいくつかの作品が翻訳されている。今やナーラーヤンはインドを代表する作家の一人として認められている。なかでも代表作 *The Guide* (1958)は、インド最高の文学賞 Sahitya Akademi Award の対象となり、アメリカでは映画化、舞台化され、9カ国語以上に翻訳されている(Varma 39)<sup>2)</sup>。現在では、インド出身の作家による作品が欧米で出版されることは何ら珍しいことではないが、彼がデビューした頃の事情は特別だった。当時インドには出版社がほとんどなく、インド生まれの英語作家には何の関心も示されていなかったという(Croft 92)。処女作 *Swami and Friends* はイギリスに住む友人の尽力の結果、1935年イギリスで出版にこぎつけた。以降の作品も出版社を転々としながらイギリスで出版されていた。ところが、アメリカでの出版を期に一躍人気作家の仲間入りを果すことになる。アメリカでは、1953年に第4作 *The English Teacher* を皮切りにその後2年間のうちに合計4作品が出版された。そして1956年ロックフェラー財団の招聘を受けアメリカへ渡るや出版社から次々と出版の申し出を受けるほど、アメリカの出版界でナーラーヤンへの期待は高まっていた。結局大手の Viking 社と契約を結び、生まれたのが *The Guide* である。以来イギリスとアメリカの出版社がしのぎを削るように、彼の作品の初版を出している。デビュー当

<sup>1)</sup> 本文中または注でナーラーヤンのこれらの作品を引用する際、次のように略記することとする。*The Guide* = *Guide*, *The Vendor of Sweets* = *VS*, *My Days: A Memoir* = *MD*, *My Dateless Diary: An American Journey* = *MDD*, *A Writer's Nightmare* = *WN*, *A Story-Teller's World* = *SW*。

<sup>2)</sup> Varma はフランス語、イタリア語、オランダ語を始め8ヶ国語の翻訳を数えている。その後、少なくとも日本語訳が1995年に出版されている。

時と比べるとインドの出版界ももちろん発展してはいるが、現在でも英語を解するのはごく一部の階層に限られていることと本の購買率が低いことから<sup>3)</sup>、研究者を除けばインドにはナーラーヤンの読者は極めて少ないと考えられる。つまり、彼の作品は始めから外国の読者を想定しており、その状況は今も大方変わらないのだ。

### 3. アメリカ人にとってのインド(人)像とナーラーヤンの反応

1956年のナーラーヤンの渡米は、50歳にして初めての外国旅行であった<sup>4)</sup>。アメリカには、当時インドでまだ普及していなかった自動車やテレビなどを始め、目新しい物質が溢れていた。物質面のみならず、人々の合理主義的な思想と行動に対しても感心したり、時には抵抗を感じることもあった。また、日ごろ接触のない外国の読者の声を直接聞く機会にも恵まれたことは、作家にとって刺激となったに違いない。ここでは、アメリカでナーラーヤンの作品が与えていた印象とそれに対するナーラーヤンの反応を見てみたい。

ナーラーヤンのアメリカ滞在記は、小説同様日々の行動、出来事を細かに描いている。アメリカで彼は各地を旅行したり、出版社、映画スタジオ、テレビ局や大学など多様な場所を訪れ、多くの人と出会っている。名前が挙がっているだけでも100人を越すが、さらに散歩中に出会った人やレストランの従業員との会話まで記されている。小説の世界と同じく、彼らとの会話は決して長く続いたり、込み入った議論に至るものではない。しかし、彼らが相手をナーラーヤンと知らずに話しかける言葉の中にこそ、日ごろインド(人)に対して抱いているイメージが露呈しているといえるのではないだろうか。よく話題に上るのは、Mahatma Gandhi、Jawaharlal Nehru といった有名政治家のほか、大家族制度、カースト制度などのインド特有の慣習、さらに宗教、神秘主義、ヨーガなどである。

ナーラーヤンの作品を読んだ人々、特に *The English Teacher* の読者からは、神秘体験について意見を求められることが多かった。では、作者自らの体験に基

<sup>3)</sup> インドでの出版事情に関しては次のような逸話がある。ある時、アメリカの出版者がナーラーヤンに作品(*The Bachelor of Arts*)のマイソールでの発行部数を尋ねる。人口275,000人の街で、彼の作品を読むことができ(つまりその程度英語を理解でき)、彼の作品を好み、ペーパーバック冊(当時1.5ルピー)を買うことができる人は5,000人程いるが、売れるのは200部くらいだと彼は答えている(SW 16)。

<sup>4)</sup> ナーラーヤンの生年については1906年と1907年の2説があり明確にはなっていないが、本稿では1906年説をとる。

づいた作品でもある *The English Teacher* を取り上げてみよう。

主人公 Krishna は、仕事に対して情熱を失いつつある英語教師である。妻は出産のために里帰りしており、彼は大学の寮で一人気ままに暮らしていた。娘も3歳になり、舅からの申し出によって、クリシュナは妻と娘をマルグデイに迎えることになる。そのために新しく家を探す様子や、大学の同僚たちと交わす他愛のない会話といった細部までが作品には描かれている。責任感の乏しいクリシュナだったが、妻と娘への愛情に目覚め、幸せに暮らし始める。ここまでは他の作品にも共通する日常生活の描写である。ところが後半では、ありふれた日常生活から一変して、神秘的な世界が繰り広げられる。ある日妻がチフスにかかり、他界する。クリシュナは悲しみに暮れるが、ある霊能力者の導きで妻の霊と交信できるようになる。次第に立ち直っていくクリシュナは、彼女の霊と過ごす最後の夜が明けていくのを見て、「生と死への感謝を感じる」(grateful to Life and Death)ところで物語は終わっている。

ナーラーヤン自身はこの作品について、読者の反応を次のように判断している。

Many readers have gone through the first half with interest and the second half with bewilderment and even resentment, perhaps feeling that they have been baited with the domestic picture into tragedy, death, and nebulous, impossible speculations. (MD 135)

しかし彼の意に反して、アメリカでは後半の 'spiritual' な部分こそ読者の興味を引いたのである。アメリカでの出版の際 *Grateful to Life and Death* というタイトルに変えられていることから、ラストシーンの生と死への悟りに対する注目度がうかがえる。改題をしたミシガン大学出版局長はこの作品を「生涯における偉業として十分なもの」と絶賛している(MDD 160)。この作品の読者とナーラーヤンは直接対面したのだが、彼らの関心は明らかに神秘的なものに集中していた。知人にまで神秘体験について語るよう強いられると、彼は話をそらせるようになっていく(MDD 171)。好むと好まざるに関わらず、この作品はナーラーヤンという作家の持つ神秘体験を読者に強く印象付けたようだ。知人を介して知り合いになった Greta Garbo にも人間の生と苦しみの意味を熱心に問いかけられ、瞑想の方法を尋ねられる。彼は気が進まないながらも彼女に mantra (呪文) を教えると、ガルボは感動して 'You belong to a nation which is highly advanced in

these matters' (*MDD* 175)と言う。彼女は、生死についての理解や瞑想などはインド人一般が会得しているものと考えているようだ。

ナーラーヤンが個人としてのみならず、「精神的に卓越したインド人」の代表者であるかのように見られている例は他にもある。たとえばある新聞記者は、アメリカは物質的には豊かであるが自殺率や離婚率が高いことをあげ、その解決策をナーラーヤンに求めている(*MDD* 54)。また、あるパーティーの席上で神学についての口論が起こったときも、ナーラーヤンは食事の方が気になって議論に参加しなかったのだが、その態度を、悟りをひらいているため冷静でいられるインド人の姿と誤解される。若い国民である彼らアメリカ人が探し求めている答えを、インド人であるナーラーヤンはすべて握っていると勝手に決めつけているのだ(*MDD* 167)。

以上のことから、アメリカには「伝統と哲学の国インド」および「神秘的なインド人」というステレオタイプがあるようだ。ナーラーヤンを知らない人でさえ、風貌から彼をインド人と判断するや、そのような話題を持ち出している。つまり、これらのイメージが個人々の経験と関係なくインド人一般に押しつけられることをナーラーヤンは身をもって体験したのである。前述のように、*The English Teacher*においても神秘体験がとりわけ注目されていた。すなわち、多くの読者を持つアメリカで、自らの作品が「神秘的なインド人」というイメージの強化につながっていることを彼は知ったのだ。次に、このアメリカ滞在中に書かれた *The Guide* を考察してみる。

この物語の主人公 Raju は、マルグディの駅で観光ガイドをしていた。彼は人妻 Rosie に恋し、マネージャーとなって彼女の踊り子としての道を開いてやる。しかし、彼女の夫から送られてきた宝石の受け取りに、彼女のサインを偽造したことが発覚し、投獄される。刑を終えた彼は行く当てなく寺院にいるところを聖者と勘違いされる。折りしも旱魃が起っていたため、雨乞いのための断食を決行するはめになる。作品はラージュのこのような数奇な運命を描いたものである。

ナーラーヤンは自伝でこの作品の構想を次のように回想している：'At this time I had been thinking of a subject for a novel: a novel about someone suffering enforced sainthood. A recent situation in Mysore offered a setting for such a story.' (*MD* 167)これは当時マイソールで起きていた旱魃に言及している。実際に市議会の要請で雨乞いが催され、一団のバラモンが断食をして、12日目に雨が

降っている。これまでの研究は、ここで言われている 'enforced sainthood' をラージュが周囲の人々によって「無理やり聖者にさせられたこと」と解釈し、作品を個人の意思ではなく他者との関わりの中で人生が決められていくインド的状况を描いているとみなしてきた(Walsh 117)。しかし、このような状況は果してインドだけに固有なものであるといえるだろうか。ラージュの 'sainthood' はそもそもひとりの男の勘違いから始まっている。つまり、あるイメージを与えられた人間が自分を「にせ者」と知りつつも、次第にその役を演じざるを得なくなってしまうのである。このような過程はインドのみに限られたものではないだろう。たとえば、「神秘的なインド人」というイメージを押し付けられ、精神的な教えを乞われていたアメリカにおけるナーラーヤン自身の姿にもこれは重なっている<sup>5)</sup>。

また、物語の中心的人物ではないが、*The Guide* には一人のアメリカ人が登場する。カリフォルニアからやって来た彼は、映画とテレビ番組を制作しており、雨乞いのシーンを撮影し、アメリカで放送しようというのだ。彼はジープで運び込んだ撮影のための機材を設置し終わると、ラージュにインタビューを始める。

'Let us chat. Okay? Tell me, how do you like it here?'

'I am only doing what I have to do; that's all. My likes and dislikes do not count.'

'How long have you been without food now?'

'Ten days.'

'Do you feel weak?'

'Yes.'

'When will you break your fast?'

'Twelfth day.'

'Do you expect to have the rains by then?'

'Why not?'

'Can fasting abolish all wars and bring world peace?'

'Yes.'

'Do you champion fasting for everyone?'

<sup>5)</sup> ナーラーヤンは、アメリカで超能力を試されたことがあり、当時を「私はラージュと同じ状況にあった」と回顧している(WN 104-105)。

'Yes.'

'What about the caste system? Is it going?'

'Yes.'

'Will you tell us something about your early life?'

'What do you want me to say?'

'Er — for instance, have you always been a Yogi?'

'Yes; more or less.' (*Guide* 243-244)

断食の話をしていたのに、話題はなぜかカースト制や前世に至る。脈絡がなく、個々の事柄を理解しようというよりは興味本位としか考えられない尋ね方である。これらの話題は、アメリカ人テレビマンがインド人に対して抱いているイメージと関心の一環といえよう。同時に、聖者でないにもかかわらず取材をされて、当り障りのない返事をしてごまかそうとしているラージュは、アメリカ滞在中質問攻めになっているナーラーヤン自身の姿を自嘲的に描いたものだともいえる。

さらに、雨乞いという儀式を番組にし商品化するテレビ産業の脅威が指摘されているとも考えられる。このようなテレビ番組を通じてステレオタイプが強化される可能性を Edward Said は次のように指摘している。「エレクトロニクス時代であるポストモダン世界のひとつの側面は、オリентを観察する手段としてステレオタイプが強化されてきたことである。テレビ、映画、その他あらゆるメディアによって、情報はますます画一化された鋳型にはめられるようになっていく」(Said 26)。先のようなテレビ番組がインドの神秘性を生み出すこともあれば、また視聴者が既に持っている「神秘的なインド」のイメージと合致するときにはそのイメージを一層強固なものにすることもあり得るのだ。

#### 4. アメリカナイズされるインド人／インド人になろうとするアメリカ人／生粋のインド人

*The Guide* ではアメリカ人テレビマンがマルグディへ取材にやって来たが、*The Vendor of Sweets* においてはマルグディとアメリカの関係はさらに深まる。表題となっているマルグディの菓子屋 Jagan の息子 Mali がアメリカ留学を果し、ひとりのアメリカ人女性をマルグディに連れ帰る。マリは留学中にアメリカ式の生活を始め、帰国後もインド的なものを否定し西洋的な生活を続ける。ジャガン

は、帰国した息子の西洋人のような体格と服装や持ち帰った豊富な文明品に圧倒される。マリはインドで、アメリカ製の奇妙な機械を製造、販売しようとする。それは、登場人物、プロットなどのノブを好みに合わせて紙を入れるとタイプライターのように物語を打ち出す「物語生産機」'story-writing machine'なるものである。ジャガンは資金提供を頼まれるが、ビジネスの話についていけずうやむやな態度をとる。息子と心を開き合うことができないジャガンは、ヒンドゥー教の神像を彫る彫刻家に惹かれていく。結局マリの事業は失敗し、結婚生活も終わりを迎える。ジャガンは隠遁者のごとく出家しようとする。以上がこの作品の粗筋とっていいだろう。

ジャガン(インド的価値)とマリ(西洋的価値)の衝突と分裂が、この作品では主たるテーマになっていることは確かである。同時にこの二人とは異なった価値観を持った人物がいる。マリの妻で韓国人とアメリカ人のハーフである Grace である。ここでは、マリ、グレース、ジャガンの価値観や行動が互いに影響し合う様子を観察したい。

アメリカからマリが送ってきた手紙は彼の生活と考え方の変化をうかがわせている。ジャガンは他人に息子を自慢して手紙を読んで聞かせていたが、一通だけ隠しているものがある。そこには、アメリカでの生活に影響を受け、インドを批判し卑下している息子の姿があった<sup>6)</sup>。

'I've taken to eating beef, and I don't think I'm any the worse for it. Steak is something quite tasty and juicy. Now I want to suggest why don't you people start eating beef? It'll solve the problem of useless cattle in our country and we won't have to beg food from America. I sometimes feel ashamed when India asks for American aid. Instead of that, why not slaughter useless cows which wander in the streets and block the traffic?'  
(VS 42)

<sup>6)</sup> この手紙は実はグレースが書いたものだと後に判明する。しかし、マリが帰国後インドの後進性や非効率性を嘆き、インド的な生活と決別していることから、この手紙にも当時の彼の考えがうかがえると思なした。また、マリのモデルともいべき青年に、ナーラーヤンは会っている。彼はアメリカに留学し、西洋人と恋愛結婚をした。インドにいるかつての師に宛てた彼の手紙は、牛肉がおいしいと言い、インドの町中にうろつく牛を食用することで食糧問題が解決し、交通事情もよくなるだろうという提案をしている。ナーラーヤンはこれに対し、牛を聖なるものと考え、インドの現実から遊離したものであると批判している(MDD 51)。

これに対してジャガンは、牛殺しがヒンドゥー教の法典に定められている五大罪に当たると憤慨している。これまでの研究は、マリが西洋化(近代化)されたのだという前提に立ってきた。しかしそれは、アメリカにいるマリの立場をあまりに単純にとらえているに過ぎない。マリが「恥ずかしい」と思う背後には、食料援助のニュースが流れるたびにアメリカにいるインド人が「食糧援助を必要とする貧しい国」の出身者として見なされ、また自己認識することを余儀なくされているという状況があるのではないだろうか。マリはそのイメージから脱するために、何らかの解決策を示したり、母国を批判した可能性が考えられるのである。つまり、アメリカ的な発想を身につけたのは「食糧を乞う貧しいインド人」と同一視されるというステレオタイプ化を逃れるための方策でもあったのだろう。マリは帰国後もアメリカでの生活をそのままインドで続けようとする。文明の利器に囲まれ、洋服を着、インド料理を食べずに缶詰ばかり食べているが、帰国当初、外国的な雰囲気を感じさせていた新鮮さや輝きが失われはじめ、事業も失敗に終わる。一時は人目を引いた西洋の豊かさもインドの風土には生き残れないことを示唆しているようである。

アメリカナイズされるマリとは逆に、妻グレースはアメリカ人であるが、インド的なものに憧れる。彼女はインドに関心を持っているが、マリとの結婚のしかた(親に相談もなく、しかも正式な結婚ではない)だけをとっても、インドの現実に対する認識が欠けているといえる。グレースはマルグデイへ着くと、通りやバザールを見て‘Oh, charming! Charming! Charming!’と無邪気にはしゃぐ(VS 44)。一方、ジャガンは「カーストを持たない女性’casteless girl’である息子の嫁の話題が出るのを恐れて、人目を避けるようになるのである<sup>7)</sup>。グレースはインド人の嫁らしくなろうと努力し、インドの慣習を実行するが、自らのイメージと思いこみにしたがって行動するため滑稽な失敗をし、現実への理解のなさが浮き彫りにされる。たとえばサリーを着たはいいが、調理場を磨こうとして屈んで膝を露わにしてしまい、ジャガンは目のやり場に困る。彼女は甲斐甲斐しくジャガンの食事も作りたいと言いますが、‘casteless girl’の作ったものを食べることなど宗教上でも慣習上でも許されがたいことである。ジャガンは、自分で作ったものしか食べないという誓いを立てていることを言い訳にして断るのである。しかし、

<sup>7)</sup> カースト制度では、4つのカースト(インドではヴァルナに当たる)とその下に不可触民(アウトカースト)が定められている。カーストは世襲制のもので、外国人はカーストを持っていないため、定義上、アウトカーストより下に属することになる。

意外にもこれまで誰にも誉められたことがなかったこの習慣を彼女は賛嘆し、ジャガンも気をよくして自らの食習慣について講釈を始めるというコミカルな展開につながっている。

彼女は普段インド的な服装や家具などに関心を示しているが、ある日カースト制について抱いていた不安をジャガンに漏らす。

'I had heard so much about the caste system in this country, I was afraid to come here, and when I first saw you all at the railway station I shook with fear. I thought I might not be accepted. Mo has really been wonderful, you know. It was very courageous of him to bring me here.'

'Well, we don't believe in caste these days, you know,' Jagan said generously. 'Gandhi fought for its abolition.'

'Is it gone now?' she asked innocently.

'It's going,' Jagan said, sounding like a politician. 'We don't think of it nowadays,' hoping that the girl would not crossexamine him further. (VS49)

今やインドに受け入れられたつもりの彼女の無邪気さと、'casteless girl'の作ったものなど食べられないというジャガンの感覚とのギャップは決定的である。実用的でもないのにサリーを着たり、ボブスタイルの短い髪に花を挿したり、ヒンドゥー教の慣習をとり入れたりしてインド人になろうと努力する彼女の態度は、現実よりも作り上げられたインドの異国的な雰囲気酔いに酔いしれる一種のオリエンタリズム的趣味といえよう。

そのような彼女は、同時に興味深い役割を果たしている。彼女のインド人のまねごとはジャガンに違和感を覚えさせるだけでなく、「本当のインド人らしさ」というものを再認識させているのだ。さらに、インド的なものに対する彼女の賞賛が、彼にますます「インド人らしさ」を発揮する契機を与えている。先述の *story-writing machine* を息子に説明されてジャガンは面喰い、インド古代の叙事詩に思いを馳せる。その際も彼は、今やインド的なものを一切受けつけない息子に代わって彼女に、古のインドを語るのである。

'Grace, do you know that our ancestors never even wrote the epics?

They composed the epics and recited them, and the great books lived thus

from generation to generation by the breath of people ...' (VS 59)

新しい自己を求める先の二人と対照的に、ジャガンはインドに生まれ外国へ行くことなど考えられない世代に属する。ジャガンは確かに日常的にヒンドゥー教の古典から言葉を引用したりしているが、彼のインド的な価値観も不動のものとはいえない。彼は先のマリの手紙に対してはヒンドゥー教徒として憤慨していたが、帰国したマリの姿を見ると勢いを失う。見違えるように西洋風の立派な紳士になったマリに対して、ジャガンは思わず 'sir' と呼びそうになったり敬語を使いそうになったりする。マリがグレースと結婚したのだと平然と告げると、ジャガンは驚いて様々な疑問を持つが、気後れして何も尋ねられない様子は滑稽である。この頃のジャガンは、アメリカナイズされたマリに影響され、彼に追従するように牛が交通の邪魔だと発言したりしている。しかし、息子の行動とりわけビジネスに関しては理解できず、結局息子とは分かり合えないと悟る。そして、ジャガンはヒンドゥー教の定める、人の一生のあり方にしたがって出家の道を選ぶとするのである。

この物語には、マリ、グレース、ジャガン三者それぞれの異文化との関わり方と影響が描かれているといえよう。マリが西洋的な価値観を取り入れた背後には、単なるアメリカの影響のみならず、アメリカで「貧しいインド人」とみなされるステレオタイプ化への抵抗の可能性もうかがえる。しかし彼は結局インドで成功を掴むことができない。グレースのインドへの憧れはイメージが先行した、現実に対する理解の浅いものである。彼女はインド人になったつもりでも、ジャガンの目には 'casteless girl' に過ぎないのである。この二人はそれぞれアメリカとインドという反対の世界に惹かれている。しかし、新しい自己を求め、獲得したつもりでいても、現実と齟齬を来している点で共通しているのである。他方、ジャガンは終始インド人であり続けていたが、この二人との関わりを通して彼の価値観や行動も微妙に揺れ動いている。かつては菓子屋の店内でヒンドゥー教の聖典バガヴァッド・ギーターを読んでいたが、マリの留学中はアメリカからのエアメールに代わり、マリが 'casteless girl' と結婚したことを知ると再びギーターに戻るといふ行動の変化は、その揺れを端的に示しているものといえよう。また、グレースというアメリカ人との接触が彼に「インド的なもの」を再認識させる契機となっている。このように、これらの人物が直接・間接的な接触を通して異文化を解する過程は決して単純で直線的でない。また、その経験が自己認識にあた

っても複雑な影響を及ぼしているといえるのである。

## 5. おわりに

ナーラーヤンの小説は主にマルグデイにおける日常生活を描いているため、異文化接触やその影響といった側面が注目されることは少ない。一般に、登場人物は言動が煮え切らないという印象を免れず、「物事を分析したり、深く観察したりしない」と考えられている(King 188)。確かに、彼らが饒舌に苦悩を語ることは少ない。しかし、本稿で取り上げた登場人物を見ると、軽妙に描かれていても各々が様々な要素を合わせ持ち、それらが複雑に交差していることが分かる。同時に彼らは互いに影響を与え合っているのである。したがって、本稿のはじめに述べたような、マルグデイの住人がひたすらに西洋の影響を受けているとの理解は表面的であると言わざるを得ない。もとより、異文化接触や理解には様々な局面が考えられるものである。*The Guide*におけるテレビマンのインタビューや *The Vendor of Sweets* におけるグレースのインド熱は、アメリカ人にとって「神秘的」あるいは「エキゾチックな」インド人という紋切り型のイメージが先行しやすいひとつのパターンを例示しているといえる。ラージュ並びにアメリカ滞在中のナーラーヤンは、そのイメージに翻弄されていると考えられる。また、マリがアメリカナイズされる背景には、インド人のもうひとつの固定的イメージである「貧しいインド人」へのステレオタイプ化に対する抵抗がうかがえる。マリとグレースが新しい自己を求める一方で、生粋のヒンドゥーであるジャガンさえ、二人と接するうちに統一した自己を保つことが難しくなっている。これらの様々な局面が、単調な日常生活の中に織り込まれているのである。

前述のように、近代的な生活において、*The Guide*に見られるように異国情調を売り物にするテレビ番組がステレオタイプの(再)生産に一役買っている。また、ナーラーヤン自身もその役割から免れ得ないのである。アメリカ滞在を通して彼は、自分自身がインド人としてステレオタイプ化されることも経験し、自らの作品が「インドの神秘性」を強化したことにも気づいている。本稿で取り上げた諸作品に描かれている異文化理解と接触の複雑さは、彼自身のこうした経験を反映しているものだといえるだろう。同時に、世界に読者を持つ代表的インド人作家である彼の作品が、さらなるステレオタイプの生産と強化の可能性を孕んでいることも忘れてはならないだろう。

## 引用文献

- Croft, Susan E. "Interview with R. K. Narayan" Ed. Goyal, Bhagwat S. *R. K. Narayan's India Myth and Reality*, New Delhi: Sarup and Sons, 1993. 85-94.
- Gorra, Michael. "History, Maya, Dharma: The Novels of R. K. Narayan" Ed. McLeod, A. L. *R. K. Narayan Critical Perspectives*, New Delhi: Sterling Publishers, 1994. 42-52.
- King, Bruce. *New English Literatures*, London: The Macmillan Press, 1980.
- Narayan, R. K. *The English Teacher*, Madras: Indian Thought Publications, 1996.
- . *The Guide*, Madras: Indian Thought Publications, 1995.
- . *My Dateless Diary: An American Journey*, New Delhi: Penguin Books, 1998.
- . *My Days: A Memoir*, Hopewell: The Ecco Press, 1999.
- . *A Story-teller's World*, New Delhi: Penguin Books, 1989.
- . *The Vendor of Sweets*, London: Penguin Books, 1983.
- . *A Writer's Nightmare*, New Delhi: Penguin Books, 1988.
- Said, Edward W. *Orientalism*, New York: Vintage Books, 1994.
- Shankar, D. A. "Caste in the Fiction of R. K. Narayan" *R. K. Narayan Critical Perspectives*. 1994 137-46.
- Varma, R. M. *Major Themes in the Novels of R. K. Narayan*, New Delhi: Jainsons Publications, 1993.
- Walsh, William. *R. K. Narayan A Critical Appreciation*, Chicago: The University of Chicago Press, 1982.